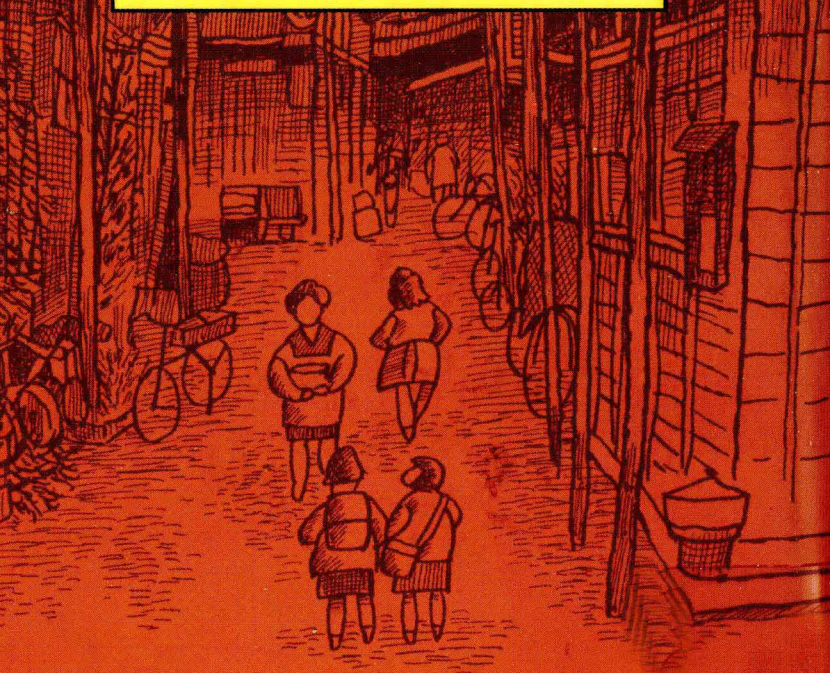


荷風さんと 「昭和」を歩く

半藤一利



荷風さんと
「昭和」を歩く

半藤一利

〔著者紹介〕

半藤一利（はんどう・かずとし）

1930年東京生まれ。1953年東京大学文学部卒業。同年文藝春秋入社。以来「週刊文春」「文藝春秋」各編集長、出版局長、専務取締役等を歴任。現在、文筆業。

著書に『聖断』（文藝春秋読者賞）『日本のいちばん長い日』『指揮官と参謀』『漱石先生ぞな、もし』（新田次郎文学賞）『続・漱石先生ぞな、もし』（以上、文藝春秋）、『戦士たちの遺書』（日本映像出版）、『山本五十六の無念』（恒文社）、『大相撲こてんごてん』（ベースボール・マガジン社）、『昭和史の転回点』（図書出版社）、『山県有朋』『歴史探偵 昭和史をゆく』『原爆の落とされた日』『日本海軍の栄光と挫折』（PHP研究所）等多数。

荷風さんと「昭和」を歩く

発行——1994年12月27日 第1刷発行

著者——半藤一利

発行者——綿引好夫

発行所——プレジデント社

〒102 東京都千代田区平河町 2-13-12

ブリヂストン平河町ビル

電話：代表 (03) 3237-3711

振替：東京 8-35607

印刷・製本——中央精版印刷株式会社

©1994 Kazutoshi Handou Printed in Japan

ISBN4-8334-1546-1 C0095

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

荷風さんと「昭和」を歩く・目次

序章 一筋縄ではいかぬ人 7

小さすぎた棺／同行二人／日記と日記の間

第一章 この憐れむべき狂愚の世——昭和三年〜七年—— 23

乱世にありて／陰謀の機密費／刺客ヲ論ズル／霞ヶ関
の義挙／肥満豚の如く／一人一殺／一番槍の功名

第二章 女は慎むべし慎むべし 59

ブラトニック・ラヴ／姪の光代／円本ブーム／本間雅
晴の妻

第三章 「非常時」の声のみ高く——昭和八年〜十年—— 81

非常時日本／発売頒布の禁止処分／三縁山の鐘の音／
東郷元帥の孫娘／殺したるは中佐某

第四章 ああ、なつかしの瀬東の町 103

玉の井初見参の記／なぜ玉の井へ／どぶっ蚊の声／南
風烈しく蒸暑し／銘酒屋のお茶／数字的な考察

第五章	大日本帝国となつた年——昭和十一年——	129
-----	---------------------	-----

二月二十六日／「兵ニ告グ」のおかしさ／寺内寿一元帥／ラジオは叫ぶ／国名は大日本帝国

第六章	浅草——群衆のなかの哀愁	155
-----	--------------	-----

浅草の哀愁／観音さまのお神籤／ひょうたん池／羽子板市／淨閑寺の筆塚

第七章	軍歌と万歳と旗の波と——昭和十二年～十四年——	181
-----	-------------------------	-----

蘆溝橋事件のあとで／千人針のこと／隅田川に捨てる／フランス万歳

第八章	文学的な話題のなかから	201
-----	-------------	-----

堀口大學先輩／一葉の写真から／終日電話の鈴鳴響く／夏目漱石／鷗外記念館にて

第九章	「八紘一字」の名のもとに——昭和十五年～十六年——	223
-----	---------------------------	-----

臣道実践の正体／ナチス・ドイツ嫌い／薩長嫌い／南

進だ南進だ／カントクエン／後世史家の資料

第十章 月すみだ川の秋暮れて 251

向島の雪見／墨堤の桜／乗合船／露伴「春の墨堤」／
吾妻橋・再説／亀田鵬斎のこと／つばたれ下る古帽子

第十一章 “すべて狂気”の中の正気——昭和十六年～二十年—— 277

十二月八日のこと／戦時下において／吾が事に非ず／
織月凄然

終章 どこまでもつづく「正午浅草」 307

観音堂の鬼瓦／《陰。正午浅草》

あとがき 315

主な参考文献 317

荷風さんと「昭和」を歩く

装幀・熊谷博人

扉カット・半藤一利

カバー絵・石丸弥平

序章 一筋縄ではいかぬ人



● 小さな棺

「死ぬ時は、出来ることならぼっくり死にたいね」

永井荷風は昭和二十五年三月号『改造』の「放談」でそう語っていたが、その願いどおりに急死した。人の世話にも金の世話にもならず、千葉県市川の自宅の書斎兼寢室の六畳間で、ひとりぼっくりと逝った。死因は胃潰瘍の吐血による窒息死であった。昭和三十四年四月三十日未明三時ごろという。

死後、その追悼記事や死に方の是非についての論評などが新聞雑誌にのって、しばしマスコミは賑わった。いくつかの週刊誌もまた派手派手しくそれに参画している。その年の四月八日創刊号発売の、いわば出来たてのホヤホヤの「週刊文春」は八ページもの特集を組んで、なぜか大いに気を吐いた（五月十八日号）。題して「荷風における女と金の研究」。その書きだしのところを長々と引用してみる。

「荷風はうっすらと口をあけていた。骨太なだけに、胸やろっ骨がむごたしく浮きだし、細長い指の白さが気味わるかった。

『もう、いいんですかい』

葬儀屋がそういったが、誰も返事をしなかった。面にあった白いきれを静かにのけると、人の輪はぐっと寄って、せばまったが、その姿勢でみんな立っていた。手を合わせるものもなかった。

『いいんだね』

もう一度そういうと、葬儀屋は二人の人夫にあごで指示し、くるくるッと荷風のなきがらをシートで包んだ。よいしょッとばかり、頭と足と胴の三カ所からもちあげ、棺の中に入れた。

棺は市川署が葬儀屋に手配してとどけさせた二千五百円のものという。色あせたタオルねまきのなきがらが横たわるには、小さすぎたようだった。

『もう少し、下げなきや』

『じゃ脚をまげろ』

葬儀屋の手で荷風の脚は折れんばかりにまげられた。死後二十時間たった脚は、硬直して、容易なことではまがらなかった。死臭のしみた手が、ぐいぐいと力まかせに脚をねじた。頭が、ごつごつと、棺にうち当って音をたてた。地獄の鬼さながらの、むごい扱いようである。悲惨眼をおおいたばかりであった。小さな棺に、その長身を静かに横たえたなきがらは、まるで荷風にして荷風でなき、ものようであった。眼のまわり、こめかみ、頬、口の辺。そう、口もとに力

ミソリの剃りきずか、血が赤くこびりついている。

だが、荷風のデスマスクは安らかであった。面のどこにも苦もんの色をみせていず、臨終のままでの安らかさがあった。いつもの顔をしていた。そして人のじろじろ見るにまかせられた。

花一つおさめられるでもなかった。愛用のベレエも、時計も最後の最後まで読んでいた洋書も、なに一つ身につけていたものを、なきがらはたずさえていなかった。ゆかたが一枚さかさまにかぶせられ、三文銭をいれた袋が胸のうえにそっとおかれた。そして、ふたがあっさりとかぶせられた。

文豪の最後としては、さびしすぎる一瞬であった」

いまさら名乗るもおこがましいが、これはわたくしが書いたものなのである。創刊にともなう人事異動で週刊誌編集部に配属され、毎週毎週いわゆるトップ記事を書きなぐった。洩々というのもあったが、これはみずからいいだして勇んで書いたもの。というより、その日ずいぶん早く荷風死すの第一報が入ったとき、それッといってすぐ飛びだせるものがいなかった。いや、かんじんの荷風の家を知っている編集者がひとりもいなかった。前々から荷風さんを崇拜するわたくしだけがとくと存じていた。晩年の荷風さんをそれとなくお送りしたことがあったからである。

もう大分記憶も薄れてきたが、市川のお宅にかけつけたのは、のちに大勢むらがった人びとのなかでもはじめの五本の指に入るくらい早かった。警察の検視がどうやらすんだばかりのころで、

荷風さんは洋服のまま万年床から南向きに半身をのりだし、うつ伏せに横たわっていた。あわてて社を飛びだしてきたので取材用のノートブックを忘れ、やむなく文藝手帖の余白に散らかった書斎兼寢室のさまをスケッチした。

のぞいた部屋の入口のすぐ右手に、先生愛用のよれよれのレインコートが、釘にひっかけられてさがっている。主を失ったいまは無用のものと化す、形見に頂戴するか、と一瞬頭をかすめるものがあつたが、やめた。いまは、たとえコソ泥の汚名をうけようとも、あのとき……と少なからず残念に思っている。

と懐旧の情にひたつていてもキリがない。書かねばならないのはコソ泥のほうでなく、ジャーナリストの「仕事」にかんすることであつた。実はこの「週刊文春」の遺骸納棺の記事は当時そこぶる評判が悪かつたのである。大袈裟だよ、これを書いたやつはいったい何を見ていたのか、にはじまって、ある出版社の社長が「まったくのでたらめだ」と全否定した、とも聞かされた。

あの日オレは一日中永井邸にいて、一部始終を見とどけた、オレはこの目で見たとおりの事実を書いたんだと、断々乎として頑張りたかつたものの、いまだ週刊誌の信用が確立していないとき。「どうせ週刊誌なんてものは」と一笑されるのがオチで、なにより相手の社長の権威がものをいった。

わたくしの勤める社のお偉ら方までが、

「あんまり舞文曲筆しないようにな」

とおごそかにのたもうたのには、かなり釈然としないものが残った。しかし血気の「青年将校」たらんには分別がありすぎたし、それに週刊誌記者という仕事で、鉄砲水のような時間に追われてつぎからつぎへ、ぐじぐじと停滞していることを許してくれなかったのである。

ところで最近、元東京新聞記者頼尊よしたか清隆氏の著書を読んでいて、面白い記述にぶつかりっぱなしに頬の筋肉がゆるんだ。頼尊さんも当日現場にいたらしい。「その午後の荷風邸はごった返していた。……ごった返した原因は親戚や文壇人がきびすを接して弔問に來たというのではなく、新聞、ラジオ、テレビ関係のジャーナリスト達がほとんど」とまづ書いてある（わたくしが駆けつけたのは午前中、念のため）。注目すべきはつぎのところ。

「玄関に立っていた僕らの耳に入ってきたのは、家の中ではもっぱら遺産や著作権の問題が話しか合われている、ということだった」

それから氏はおもむろに当時の東京新聞の記事を引用する。多分ご自分が執筆されたものなのであろう。

「荷風老の居間から発見された現金二十八万円と、定期預金八百万円、普通預金二千万円の通帳（いずれも概算）は令弟威三郎氏の名義で三菱銀行八幡支店に預けられた。同八時半には棺が運びこまれ、つましい納棺式が行なわれた。この棺は市川署から葬儀社に手配して届けさせた二千

五百円の質素なもの。色あせたタオルのねまきのヒザを折ってやっと棺に納めたが、……（以下略）

自己正当化のために長々と引用したのではない。学びたいのは、およそ「事実」とは本質的にそのようなもの、ということ。家の中にいた人びとにいわせれば、話し合われたのは遺産や著作権の問題なんかじゃない、というかもしれない。棺だって金のかかった立派なものであった、といまも出版社の社長は主張するにちがいない。しかし、棺がやっと運びこまれたのは夜の八時半なのである。いったいそれまで何をぐずぐずしていたのか。

そんなことをいまさらのように考えているうちに、ふと想いだされてきた古典的な話がある。アメリカの名ジャーナリストのウォルター・リップマン著『世論』のなかにでているもので、よく引用される話にこんなものがある。

ある市で心理学会がひらかれていた。そこへ突然ひとりの男が血相をかえて飛びこんできた。つづいてもうひとり、ピストルを手にした男が……何事ならんと一同が立上って見守るなかで、二人の男の取っ組み合いがはじまり、先なる男は組み敷かれ、後なる男がピストルを乱射した、かと思うとそのまま二人はそそくさと会場の外へ出てしまった。この間ものの二十秒とかからない瞬間の出来事であった。

騒ぎがおさまったとき、議長がおもむろに出席者に、目撃されたありのままを書いて出して下

さい、といった。取っ組み合いはあらかじめ用意された演出であつたのである。

その結果が面白い。提出された四十通のうち、重要な事実について誤りが二割以下ですんだものは、わずかに一通。二割以上四割以下というのが十四通。四割以上五割以下が十二通。あとの十三通はなんと誤報率が五割を超えていたのである。

もっとびっくりするのは、事実を自分流につくりあげていた、つまり捏造ねつぞう一割に達するものが二十四通。一割以下のものは六通にすぎなかつたという。残りは捏造が一割以上。これをあつさりいってしまえば、やや信じるに足るものはわずか六通しかなく、少なくとも十人はかなりの部分でウソか勘違いを書いているということになる。まったくウソのような話であるが、権威ある著者がでたらめを書くとは思えない。

目撃者にしてこのとおり。目撃者や体験者の証言はいちばん信用できる、というのが世の常識なるが、はたしていつでも絶対的に確実か。そこに根本的な問題が残ってしまう、「事実」をこれが事実だとして伝えることのむづかしさ、それである。

——以上、これから荷風さんときき合つて「昭和という時代」をあちこち散歩するにさいしての、長すぎる前口上なのである。三十数年も前に「語らざる荷風」を書いたとき、何たるデータメを、とやられた。それがこんどは生きている荷風をとり扱うとなると、これはもう大事業。なにしろ相手は一筋縄はもちろん十本の荒縄でやっても、正しくつかまえることができそうもない